大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

フーコー「生ー権力」論から見るドイツ啓蒙教育学の身体の教育

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪公立大学大学院文学研究科 公開日: 2024-06-26 キーワード (Ja): ドイツ啓蒙教育学, J.B.バセドウ, 汎愛派, M.フーコー, 生ー権力 キーワード (En): German enlightenment pedagogy, J.B.Basedow, Philanthropinism, M.Foucault, Bio-power 作成者: 弘田, 陽介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/0002000996

人文研究　大阪公立大学大学院文学研究科紀要
第75巻　2024年３月　32頁～52頁

研究論文

フーコー「生－権力」論から見る ドイツ啓蒙教育学の身体の教育

弘　田　陽　介

近代教育学の端緒にある18世紀後半のドイツ啓蒙教育学の身体の教育の特質を、特にその代表者である汎愛派教育家（J. B. バゼドウ、J. H. カンペら）やJ. H. ペスタロッチの著作を分析することで明らかにする。その際、教育者が子どもの身体を教育の対象とする技術を、M. フーコーの「生－権力」論を用いることによって抽出する。フーコーの「生－権力」論を支える二つのレベルは、人間の身体を要素化しコントロールする「解剖－政治学」と市民全体を統治する「人口の生－政治学」によって成り立っている。フーコーによる啓蒙教育学についての直接の言及は少ない。だが、その二つの視座を特に啓蒙教育学の子どもの身体の取り扱いや性の管理に適用することによって、フーコーの「生－権力」論のそれらのテキスト分析における有効性を検討し、啓蒙教育学の身体の教育が置かれる18世紀後半の思想空間を提示する。

キーワード：ドイツ啓蒙教育学、J. B. バセドウ、汎愛派、M. フーコー、生－権力

序

本稿は、18世紀後半から19世紀前半にかけてのドイツ啓蒙教育学の代表的な教育者、哲学者の著作において、身体[1]がどのように扱われているかを考察する。この時代の身体教育実践の代表格として、汎愛派の創始者バゼドウ（J. B. Basedow, 1724-1790）の著作を基点として検討し、彼らが身体をどのように教育において取り扱い提示するかを明らかにする。このバゼドウから、彼の同時代人、または後に続く者の著作における身体概念を検討し、その身体と教育をめぐる教育思想史を提示することを試みてみたい。

筆者は、これまで18世紀後半のドイツ啓蒙教育学の教育家が残した子どもの教育を具体的に描いたテキストに光を当て、近代教育の萌芽期から現在の教育までに到る教育思想の流れを把握する試みを続けている[2]。ドイツにおける近代教育学の発生地点である啓蒙教育学Aufklärungspädagogikとは、旧来の教育を改革すべく新規の教育施設や著述を展開した18世紀後半にドイツ語圏で活動した教育家たちの思想および実践を指す。彼らは、重商主義における社会的有用性や道徳規範を重視する教育論と、当時ドイツでも受容されていたルソーのいう合自然の教育論とを両立させようとしていたというのが定まった思想的評価としてある（Blankertz 1982:80-）。狭義の啓蒙教育学の代表格は、バゼドウら汎愛派Philanthropismusと自らを称した教育家のグループであるが、1844年から1987年までの各種教育学事典を30

点分析したリュースによれば、啓蒙教育学の教育家として、その源泉となるロック（J. Locke, 1632-1704）とルソー（J-J. Rousseau, 1712-1778）、その代表格の汎愛派の他にも、ペスタロッチ（J. H. Pestalozzi, 1746-1827）らの名前が複数の事典で挙げられている（Lüth 1990:79-）。この認識を受容し、本稿でも汎愛派をドイツ啓蒙教育学の代表格として扱い、必要に応じて広義の啓蒙教育学に含まれる教育家も扱うこととする[3)]。

さて、本稿の主題であるドイツ啓蒙教育学における身体はなぜ問題となるのか。この問いについては、差し当たりこう答えることができる。すでに多くの先行研究が論じている[4)]ように、バゼドウら汎愛派は身体教育を重視し、知的な教育との両輪で人間形成を捉えていた。後世にまで残る成果として、近代体育の父と呼ばれるグーツムーツの体育論がある。

このような学術的な系譜に加えて、彼らが活動した 18 世紀後半からの近代市民社会生成期という時代は、身体を対象とした市民統御の新たな技術が生み出された時代であることも重要である。確かに、バゼドウも「人間的な方法によって服従が可能でないならば、服従は体罰によっても強制される」（Basedow 1965b:216）と述べているように、汎愛派の多くの教育家は体罰を教育の技術として肯定している。だが、そのような直接的な体罰というよりも、さらに精緻な身体に関わる教育の技術が生み出されていた。そして、特に啓蒙教育学の教育実践とは、そのような技術を、子どもの生活にまで適用することで、さらに新たな技術や制度をさらに実験的に開発していく場であった[5)]。このようなことを念頭におきながら、ここで、汎愛派を代表格とするドイツ啓蒙教育学における教育と身体の結びつきを扱っていくことになる。

このような市民統御の技術への着眼は、本稿の著者が、M. フーコーから学んだものである。その着眼は、「生－権力」論として、今日でも様々な社会事象を分析するのに用いられている。また、フーコーはこの 18 世紀の汎愛派についても直接言及している。1976 年に出版された『性の歴史 I』において、次のような記述がある。やや長くなるが、フーコーによる記述をそのまま抜き出しておこう。

> 学童の性は 18 世紀の間に —— そして思春期の若者一般の性よりは遥かに特殊な形で —— 公の問題となっていた。医者は学校の校長や教師に語りかけたが、同時に、家族に意見を述べた。教育者たちは計画を立て、それを政府に答申する。教師は生徒に向かって、様々な勧告をし、生徒のために忠告と、道徳的・医学的手本を示す書物を書く。思春期の学童とその性をめぐって、教訓と意見と観察と、医学的忠告、病理学的症例、改革の図式、理想的制度のための計画に関する夥しい文書が書かれる。バゼドウとドイツの「汎愛派」運動によって、思春期の性の言説化は厖大な規模に達する。ザルツマンは更に実験的学校まで作ったが、その特徴は極めて綿密に考えられた性の管理と教育であったために、そこでは若者の普遍的な罪はついに経験されることがないほどであった。しかもこれらの施策において、子どもは、単に、大人たちが大人たちの間で考える配慮の無言かつ無意識

の対象であるだけではなかった。大人たちは子どもに、性についてのある種の言説を、合理的で制限された、規範的で真実の言説を強制した ―― 一種の言説による身体矯正法である。1776 年 5 月に「汎愛学舎」で催された大祝典は、まさに象徴的な装飾図案となるだろう。それは試験と文学コンクールと、賞状の授与と兵役能力審査会議の入りまじった形式であり、思春期の性と合理的言説との荘重な最初の聖体拝領なのであった。生徒に対して行った性教育の成功を実証するために、バゼドウは当時ドイツの誇るすべての著名人を招待した（ゲーテはその招待を断った数少ない人の一人だ）。こうして集まった聴衆の前で、教師の一人、ヴォルケが、生徒たちに、性と誕生と生殖の神秘について、特に選んだ質問をする。彼は生徒たちに、妊婦、夫婦、揺籃などを表わす版画を説明させる。その答えは、更に、羞らいや気まずさなしに、明解に説明される。いかなる場違いの笑いもそれを掻き乱すことはない もっともそういう笑いが起きるのは、子どもたちよりも子どもっぽい大人の聴衆の側においてであって、ヴォルケはそれを厳しく注意するのだ。最後に人々は、大人たちの前で、言説と性の花飾りを巧みな知によって編み上げたこれらのまだ童顔の残る少年たちに喝采を送るのである。（フーコー 1986:38-39）[6]

本稿で言うところの技術は、フーコーのこの引用での言葉では「言説による身体矯正法」ということになる。加えて、デッサウで華々しく開設された汎愛学舎において実践された様々な教育の事例も含まれる[7]。そこでの性の教育は、無言と無意識のうちの行われるのではなく、公の場で、羞らいや気まずさなしに、明解に説明されていた。ここでフーコーはその様子をまるで現地で取材してきたかのように描写しているのだが、フーコーはこれ以上、この著作において、汎愛派について語ることはない。つまり、その著『性の歴史Ⅰ』からは、ここに書かれている以上に汎愛派の「言説による身体矯正法」について知ることはできない。その内実を知るためには、元のテキストを読む必要がある。だが、原典を読むことだけでは、そこに潜ませられたドイツ啓蒙教育学における教育と身体の「生－権力」論を見出すことは難しい。

このような事情から、筆者は、フーコーをガイドに、啓蒙教育学を読むことで、これまで詳細に見出されてこなかった 18 世紀後半の教育の技術を読み取ることができるのではないかと考える[8]。このような目論みをもって、古典的なテキストに分け入っていくが、以下、本稿の構成は次のようになる。1. においては、18 世紀後半のドイツ啓蒙教育学の当時の社会的な位置づけを確認し、フーコーの「生－権力」論でそれを分析することの意味を論じる。2. では、汎愛派教育論の代表的なテキストであるバゼドウの『基礎教科書』や啓蒙教育学の著作における言説による身体の統御技術について詳述する。3. において、その身体の統御技術が、人間の魂を位置づけ、魂による身体のコントロールを確立していく様を明らかにする。4. では、ここまでの議論が端的に現れる性のコントロールという 18 世紀後半に特徴的な教育学の文脈において、フーコーの言う「生－権力」論が如実に現れ出ていることを捉えていく。

1. 18 世紀後半のドイツ啓蒙教育学とフーコー「生－権力」論

教育史家のブランケルツによれば、次のように啓蒙教育学の 18～19 世紀の思想的・実践的特質がまとめられるという。

> 啓蒙教育学には次の三つの共通点が見いだされる。
>
> ▽あらゆる社会的利益の代弁者として考えられる国家は、政治的経済的福祉の道具として教育を用いようとする。
>
> ▽あらゆる幸福が正当化されるために、一般的であり全般に及ぶ授業が義務とされ、それが欠けることなく実現するような公的な学校制度が拡がっていかなければならない。
>
> ▽この一般的な授業が義務となることによって、同時に学校での理論に基づく職業形成という問題も解決されなければならなくなった。（Blankertz 1982:86-87）

ドイツ各地で確立しつつあった大小の領邦国家の中で、国家の権力者は、先進的な教育を受容・開発することによって、より政治的経済的な権威を強めようとしていた。また市民レベルでも教育によって、各々が世俗的な幸福を構築していく必要性が高まり、そのために、近代市民社会を生きていくための学校教育が求められていくことになる。

このような近代的な国家およびそこに生きる市民の政治的経済的な成立期の教育における身体を、本稿では、M. フーコーの「生－権力」論を用いて論じていく[9]。それは、特に『性の歴史Ⅰ』で詳述されるが、フーコーの分析の素材としては、17 世紀以降の西洋近代の政治・経済の人口論や青少年の性を扱う精神医学・教育論といったものが含まれる。近代的な市民の生、特に「出生率、罹病率、寿命、妊娠率、健康状態、病気の頻度、食事や住居の形」（フーコー 1986:35）という生の身体的な事象は、17 世紀までの時代では言説の対象ではなかったという。だが、重商主義かつ教育・福祉を国力発展の道具と考えるそれ以降の近代国家においては、それは「有用性のシステムに挿入し、万人の最大の利益のために調整し、最適の条件で機能させるべきものとして語らねばならない」（フーコー 1986:34）問題となる。

具体的な市民の生に、二つのレベルから権力は及ぶとフーコーは述べる。その一つは「機械としての身体」を照準とする「人間の身体の解剖－政治学」である。これは個々の人間をミクロのレベルから統御する。そこでは「身体の調教、身体の適性の増大、身体の力の強奪、身体の有用性と従順さとの並行的増強、効果的で経済的な管理システムへの身体の組み込み」が行われる。また、もう一つのレベルは、「種である身体、生物の力学に貫かれ、生物学的プロセスの支えとなる身体」、つまり「繁殖や誕生、死亡率、健康の水準、寿命、長寿、そしてそれらを変化させるすべての条件」を照準とする「人口の生－政治学」である。これは市民全体を

対象とするマクロのレベルである。この二つのレベルによって、「生－権力」が発動し、それまでは国家によって調べられることや意識されることがなかった近代的な市民の身体的な生が包括的に管理されるというのが、フーコーの論である（フーコー 1986:176-177）。

さらに、この生の管理は、「ポリス」の仕事となるとフーコーは述べている（フーコー 1986:34）。近代市民社会生成期において、古代ギリシャの思想、特にアリストテレスの伝統を引く「善く生きること」を基調とした、ポリスによる統治―医療、教育、衛生、警察などの市民の生に関わる制度・技術の集成―が整備されていく[10]。このようなフーコーの『性の歴史Ⅰ』が問題を鮮明に示した生および性という身体に関わるものの議論[11]を念頭におきながら、ここからは啓蒙教育学の著作において、「生－権力」がどのように現れ出てきているのかを把握していくことにしよう。それによって、そこでの身体概念がどのように扱われ、また子どもや青少年の身体が性に縮約され、教育者の管理に置かれるのを見ていくこととなる。

2. バゼドウ『基礎教科書』による身体の「解剖」

啓蒙教育学の代表者とも言えるバゼドウは、ハンブルクなどドイツ各地で、中世以来の学校教育に対する改革教育運動を展開し、それを具現化するような教育施設を開設した。特に自ら支援を募った支援者とで独自の理念による学校・汎愛学舎を小都市デッサウに 1774 年に創設したことで知られている。汎愛学舎はそれ以降のドイツの教育実践に大きな影響を及ぼし、開設から 100 年の間にその理念を汲む学校は 60 校を越えるまでになった[12]。

その学舎に集う教育家や類似の実践を他都市で行った教育家は汎愛派と呼ばれる。汎愛派教育家の集団には、ヴォルケ（Ch. H. Wolke, 1741-1825）、ザルツマン（C. G. Salzmann, 1744-1811）、カンペ（J. H. Campe, 1746-1818）、ヴィヨーム（P. Villaume, 1746-1825）、グーツムーツら（J. C. F. GutsMuths, 1759-1839）、近代教育や思想界に影響を与えた者が多くいる[13]。

汎愛学舎の創立に際して、バゼドウは、子どものための『基礎書 *Elementarbuch*（1770）』、そしてその大幅な改稿版である『基礎教科書 *Elementarwerk*（1774）』を刊行する[14]。バゼドウがもくろむ教科書とは、「『すべての人間にふさわしい事物知識と言語知識』のための初歩教科書」（Basedow 1965a:75, 137）[15]であり、コメニウスの『世界図絵』にならって、事物についてはその実物を図版によって認識し、言語によって「物を測定、分類、命名できる」（Basedow 1972-1:98）ものであった。人間の身体も、「前頭、後頭、額、目、耳、鼻、口。眉毛、瞼、睫毛、眼球、眼の白いところ。・・・」（Basedow 1972-1:99）と上から詳細に命名、分類がなされている。また、「呼吸、発散、腫れ、腫瘍、膿。健康、強さ、病気、弱さ、美、醜さ。咳、くしゃみ、咳払い、あくび。脈拍、動悸、身震い、・・・」というように人間の身体の状態に関しても、網羅的に記述されている。さらに、人間の身体についてよく知るためには、屠殺された動物を見ることが役に立つとバゼドウは述べている（Basedow 1972-1:99）。

このように、身体の外面と内部、またその状態も、このような名称の羅列、そして人間に類似する動物の解剖によって可視化されていたのである。また、身体の部位から、感覚の性質にまで繋がる形で、人間の五官についても詳細に規定がなされている。

> 目、耳、鼻、口、そして全体に張りめぐらされた神経という部分は、統一され、そして五種類の活動をする感官の力の道具である。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚は人間の五官である。・・・五官の行いは、見る、聞く、匂う、味わう、感じるである。・・・・・・触覚の対象は、私たちの身体の一部分によって触れられる、感じうるものの表面である。だが、その感じうるものは、それぞれの性質によって、固い、柔らかい、熱い、温かい、ぬるい、冷たい、粗い、なめらかな、平坦な、まがった・・・（Basedow 1972-1:100-101）

人間の感覚も名前を与えられることによって、教科書の中で、いわば可視化され、教育の内容として取り扱うことが可能なものとされる。この身体の「解剖」[16] と呼んでいいような図と言語による定義の意義を、バゼドウはその教科書の中の教師用の記載でこう論じている。

> 私は、君たち自身の多くの事柄をクラス分け、秩序付け、命名することに慣れるために、しばしばそれらの事柄の間を切断する Abschnitt ことを書いてきた。よく熟練した子どもの教師になるためには、それらの分類はすぐに君たちにとってなくてはならないものになる。この切断は後で全体としてお互いに関係があり、協働するに違いない青少年についての多様なものの復習やまとめに、確実なやり方で役に立つ。（Basedow 1972-1:109）

図と言葉による定義を、バゼドウは「切断」と捉え、学習の手法として有意義であることを述べている。ダンスの訓練においては、「ダンスマイスターが教練場で学ぶべきことは、それぞれの訓練の要素への分別である」（Basedow 1972-2:74）と述べられる。またフェンシングにおいては、「軍刀をもった剣術家は、一、二、三、四の構えという四態で相手に打って出ると、その相手は刀で守りに入った」（Basedow 1972-2:74）というように身体の訓練においても、その訓練方法が細分化されている。その細分化は、「一つ一つの訓練をそれぞれ細かく切って要素にすると、まだ一つ一つの物への熟練に到っていない初心者は注意が同時に多数のものへ向けられることがなくなる」（Basedow 1972-2:78）という理由によって行われる。

このような分類の細密さは、身体や感覚に関してのみ行われているのではなく、例えば、音楽演奏について、「一人で演奏するのはソロ演奏である。二人で演奏する時もある。大人数で演奏すれば、コンサートである。音楽の道具には次のようなものがある・・・」（Basedow 1972-1:100）というように、生活や社会事象が細密に定義、分類されているのである。

バゼドウの教科書から約 20 年を隔て、また場所もデッサウからシュネッペンタールへと隔

たってはいるが、このバゼドウの身体の規定を引き継ぎ、体育 Gymnastik として方法論化したグーツムーツにも同様の要素化された運動の手引きがある。彼の『青少年の体育』の棒高跳びについての記述を取り上げてみよう。

> 訓練 Übung -- 身体を一本の棒で支えて一定の高さを跳び越える。このために跳躍する者は図 2 のように左手を下、右手を上にして両手で棒をつかむ。その時両腕は適当な幅に離して突張る。下側の腕は跳び越える時に身体を支え、上側の腕は身体を引き上げるのに役立てる。跳躍者は与えられた高さの割り合いに応じて 10 歩から 15 歩までの強い助走をし、下がとがった棒を左でも右でもなく、真直ぐ足の前、しかも横棒の前 2 フィートの所につき、足の弾性と手の引張りによって、身体に強い跳躍を与える。そして、それによって身体は xx の地点で強い跳び上がりが可能となり、その足は弧を描いて xx から y を越えて zz へ、あるいは棒の ab の部分が高さの割り合いに応じてより長かった場合には、o ないし p を越えて zz へ跳んでいく。(Gutsmuths 1928:237, 144)

グーツムーツによって、体育が一つの領域として確立されるまでは、経験に拠って、かつまた見て覚えるという方法しかなかったであろう運動の指導も、幾何学的に細かく規定されることになる。この xx や y などは、空間上の位置を規定するための記号である。現実には、困難であるが、グーツムーツには運動も計算可能であり、理性と訓練によって統御可能なものとして捉えられていたのである。

3.「身体の解剖－政治学」から見る魂による身体のコントロール

ここまで、バゼドウや汎愛派の後継者がその教科書において、身体や感覚といった身近な事象を、教科書に記し、細分化してきたことを確認してきた。なぜ、このように念入りに細分化してきたかについては、バゼドウは、その細分化が学習や運動の習得に役立つという理由を挙げていたことも見た。また、バゼドウは、この人間の身体の記述、つまり「その形態、配置、名前」と、「五つの感官とその働き」を認識することは「特に重要である」と、この『基礎教科書』の教師用の記載「子どもの友へ向けて」で述べている（Basedow 1972-1:98)。

筆者は、単に学習や習得といった教育的な配慮を越えた、このバゼドウが生きた 18 世紀ならではの要因がここには潜んでいると考える。それは、フーコーが言う「人間の身体の解剖－政治学」である。これをさらに考える糸口は、身体と魂 Seele という古典的な心身二元論という問題にあることを示していきたい[17]。バゼドウは、この二元論を論じるにあたって、フーコーが言う、個々の身体を断片化された「機械としての身体」として、読者の前に提示する。

君たちの毛や爪、骨や皮膚は、私が先に述べたような生をもって生きているのだろうか。否、そうではない。では、君たちの肉体の肉や血、その他の体液は生きているのだろうか？これも否だ！ では、心臓は？ これも否。なぜならそれは皮膚と肉と血からできているからだ。・・・従って、君たちの身体の見える部分 sichtbarer Teil はなんら生きていないのだ。君たちはこういうことも思いつくだろう。なんらそれ自体生きていないたくさんの部分を組み立て一緒にしても、ひっくるめて生がないのか、魂がないのかどうか、またそれが魂であるのかどうかということを問うことを。(Basedow 1972-1:103)

ここでバゼドウは、身体の部位にそれ自体に生があるかを読者に問いかけている。すでに言葉と図版によって解剖したものは部分であるが、それらはあくまで身体を構成する「見える部分」であった。見える部分のそれぞれは、またそれらを集めたものは、機械としての身体にはなる。だが、それぞれの集合体は、生を持たず、魂も持たないというのである。ここまでこの「見える部分」について説明してきたバゼドウは、この「目には見えない」魂を身体とは別のものとして定義する。

よくものを考える人間ならば、人間の身体のそれぞれの見える部分やそれらの他のすべてを組み立てたもの以外に、その身体に精気を吹き込み beseelen、感覚の性質に従って四肢 Glieder を運動させる能力と快や苦痛を知る感官力 Sinneskraft を生まれつきもっているものがあるということを知っている。この唯一で、目には見えない、さらに感官力、感覚、自己活動を授かっている存在こそが魂と称される。(Basedow 1972-1:103)

このように、魂とは「目に見えないもの」であるが、感覚し、活動する能力をもっているものである。では、ここでの身体とは何であろうか。それは魂がなければ生きているものではなかった。「人間、君は魂であり、魂は君である！ 君の肉体は君にのみ属しており、道具として世界の中に現れ、それを用いることで幸福はつくられる」(Basedow 1972-1:156) というように身体とは感覚し、活動する能力をもった魂の道具、つまりフーコーの言葉では「機械」である。加えて、「魂は動くか」という問いに対して、バゼドウはこう答える。

もちろんである。魂がほしいままに willkürlich 身体を動かし、その身体にともなって魂が動かされるというように、魂は動く。(Basedow 1972-1:106)

このようにバゼドウにとっては、身体は魂が恣意的に動かす機械であり、しかし、それは魂が現実世界で動くための機械なのである。ここまで見てきたようなバゼドウが教科書として提示した身体の細密な図鑑的な記述は、その機械の機能の一覧である。目に見えない魂を、目に

見える形をもたせて記述しようというバゼドウの試みは、魂という生を担う人間の「感官力、感覚、自己活動を授かっている存在」と身体とを分離し、身体を「機械」として位置付ける。その結果、魂が「ほしいままに」動かす身体を造りあげることがここではもくろまれている。

このような魂と同化させられた身体は、「四肢の有用性、確実性、そして美しさ Schönheit」（Basedow 1972-1:175）をもつとして評されている。様々な動きを軽くこなし、固さももち併せて、さらに外的に見て統一が取れているような四肢は「なんという調和! なんという美しさ!」（Basedow 1972-1:176）と讃えられるのである。バゼドウの同時代のドイツ語圏の教育実践家の代表者であり、啓蒙教育学の構成者にも数えられるペスタロッチはその『身体教育論』で次のように述べ、訓練である体操を三つの視角から論じている。

> 私たちは次のような体操を求めているのだ。すなわちそれは、身体陶冶 Körperbildung が精神的には精神の陶冶 Geistesbildung の手段にさえなり、それと反対に道徳的に考察すれば、道徳的発達の手段にさえなり、そしてまた、美的に考察すれば、すなわち身体的な礼儀作法とか美の熟練という点から考察すれば、美的発達の手段ともなるような、そういう体操を望んでいるのだ。（Pestalozzi 1963:65, 337[18]）。

ここで、ペスタロッチは、彼が理想とする身体陶冶、つまり体操について、古代ギリシャからの真・善・美の三つの視角から論じている。一つの現れとしては、「精神的認識の領域で、基礎陶冶によって、ある対象を観察し、思考し、比較する際」（Pestalozzi 1963:66, 338）の精神の陶冶である。それは五官に代表されるような認識の器官であり、認識一般に関わる身体の機能を指している。次いで、道徳的には「自由に、自主的に身体を支配する」ような陶冶であり、子どもは「自らの四肢の主人にならなければならない」（Pestalozzi 1963:66, 338）とペスタロッチは述べる。最後に、美的には、「社会生活において礼儀と尊敬をうるために必要な一切の事柄に関する熟練」（Pestalozzi 1963:66, 338）を養うような陶冶であると言われる[19]。ここでは、社交的な身体の陶冶が論じられ、それが美的な陶冶として論じられる。

ここで、着目しておきたいのは、ペスタロッチが、道徳的陶冶を、「自由に、自主的に身体を支配する」と記していることである。魂が身体を自由に動かし、支配することの重要性は、バゼドウの教科書においても論じられていた。身体の部位を細かく分割し、命名する際にも、身体についての学習や運動の習得に役立つと述べられていた。このような分割は、すでに見たように、まさに身体の解剖とでも呼べるものであった。だが、このペスタロッチが「身体を支配する」として述べているのは、道徳的な陶冶という区分なのである。つまり、先ほどのバゼドウらと連関させるならば、身体の情動をコントロールすることこそが道徳的であると論じられている。また、バゼドウは、そのような魂と身体の同化を美とも呼んでいた。ペスタロッチは社交における振る舞いを念頭において美的な陶冶を論じているが、そこでも身体は十全に魂

にコントロールされていなければならない。魂が身体の欲望をコントロールしてこその道徳であり、美なのである。

さて、改めて、フーコーの言う「人間の身体の解剖－政治学」について考えてみると、この「解剖」という概念を、バゼドウの啓蒙教育学の身体と魂の二元論に当てはめることは理解が得られるだろう。この「解剖」では、身体は細分化され、それぞれの集合体が人間の魂の生を担う機械であり、魂の「感官力、感覚」といった認識の活動を担っていた。また、魂は「自己活動」するとも述べられていた。人間の本体とでも言える魂は「自己活動」するために、身体は必要となる。だが、身体は魂にとって、「ほしいままに動かす」ものである。もし「動かす際」に差し障りがあってはいけないのである。つまり、魂は身体を十全にコントロールしていかなければならないのである。

「解剖」については十分に内実を把握できたように思う。さらにフーコーが「解剖」と共に述べていた「政治学」について見ていくにしよう。つまり、具体的には、魂の働きを阻害するような身体の要素は、フーコーが述べていたような「政治学」、すなわち監督者の管理の下に予め組み込まれていないといけないのである。そのような身体の要素とは、人間の強い欲望である性である。

> 子どもは、「始まりの」性的存在として定義されており、性の手前にいると同時にすでに性の中心にいて、危険な分割点に身を置いているというわけだ。両親、家族、教育者、医師、やがて心理学者は、この貴重で危うい、危険かつ危険にさらされている性的な芽を、絶えず引き受けなければならないのだ。この教育化は、とりわけ、自慰に対する戦いの中で現われるが、この戦いは、西洋世界においては、二世紀近く続いたのである。（フーコー 1986:134-135）

フーコーが言うように、啓蒙教育学にとっては、子どもは「性の手前」にいる。手前にいるからこそ、ぜひとも管理されなければならない「危険な分割点」、つまり「性の中心」にいることになる。そして、その管理は、他者を必要とする性交ではなく、一人で行われる自慰にまで及ぶ。いや、及ぶというよりも、一人で隠れて行われる自慰を対象にしなければ、この性の管理という教育者たちにとっての「戦い」に勝利することはできないのである。

4.「生－権力」としての性のコントロール

この節では、フーコーが「生－権力」論を抽出するにあたって、特に焦点にした性についてのバゼドウたち啓蒙教育学の論を見ていくことになる。ここまで見たように、啓蒙教育学の子どもの教育方法においては、身体は知的認識を成り立たせる感覚器官と、食や性という欲望と

に大別される。前者はバゼドウで見たように、人間の魂を下支えする機械であり、後者は魂が円滑に自己活動するためには、コントロールされるべき欲望であった。また、前者に対して、より感覚の働きを高めていくことが、後者に対してはより欲望の働きを抑えていくことが目指される。このように身体とは、感覚と欲望とに分解され、それぞれに応じて、教育が関わることになる。本稿の前節では、認識し自己活動する魂の下働きをする身体について見た。本節では、コントロールされるべき欲望、特に性を、啓蒙教育学がどのように扱ったかが焦点となる。

近代の市民社会が形成されていく中で、性という人間の活動が目につかないところに置かれていくことは、フーコーも論じている[20]。さらに、子どもの性が統制の対象となっていくことは、自慰行為の禁止という事項においてよく知られるものとなっていく。1715 年にロンドンで著者不詳の形で出版された『オナニア』に端を発し、スイスの医師、ティソ（S. A. Tissot, 1728-1797）による 1758 年の『胆汁質論、及び自慰によって生じる病気についての試論』および以降の類似の著作は、その後の教育家に大きな影響を与えた（スタンジェ/ネック 2000:53-）。それらの著作によって、それまでは宗教的な罪として見なされてきたが、比較的奔放に行われてきた自慰が、道徳的な罪および医学的な病として社会的な害悪になったとも論じられている（金塚 1982）。

そのような時代の中で、バゼドウら汎愛派も、性の問題をその教科書で取り扱っている。子どもの教育について考える者が、なぜそのような性の問題を危険視するかというと、それが子どもの理性ではコントロールができないものだと考えるからである。バゼドウも、「普通ではない魂の状態において、時折身体において強く、危険なほど働きを感じ取ることができるが、その状態は情動とか、心の動きと言われる」というように魂の異常な状態を分類している。このような情動に怒りも分類されるのであるが、このような怒りによって、「私たちは様々に害され、徳や怜悧の規則に沿わず、健康や、多くのものが損なわれ、常に健全な理性が奪われる」（Basedow 1972-1:144）と言われる。すなわち、情動に動かされている状態は、健康を損なっている、つまり病気であると見なされる。

加えて、「魂が病気であると見られうるものは、肉体が病であるのと同じように扱われる」（Basedow 1965b:217）と、別の著作でバゼドウが述べているように、魂の病気も身体にその罪が帰せられるのである。さらに続く箇所で、一人で静かにして、禁欲し、薬を飲み、背中にブラシをかけると、「不健康で魂を理性の営みから妨げている液汁 Saft が背中に引き出される」（Basedow 1965b:217-218）のだと、バゼドウは言う。身体の病、引いては魂の病の原因とされた「液汁」は、ブラシによって身体から排除される。病んだ身体は、液汁という物質の形でもって、彼の定義する身体からは放逐され、治療されると考えられていた[21]。つまり、魂の病気も、身体に起因するものとして、身体の病気と同じように身体に対する治療によって取り扱われた。

また、バゼドウと同じ汎愛派の教育家であったカンペも、自ら編纂した『実践的教育者の会

による学校および教育総体に関する一般点検書』叢書での教育論において、身体と魂について論じ、そこから性の問題について触れている。「魂が肉体に生を与えるのをやめるやいなや、肉体は何かすることができるのだろうか？ いや、何もできない。肉体は力なき塊である」（Campe 1979a:101）。カンペにとっても、バゼドウ同様に、身体は魂が生を与えるものであり、コントロールするものである。そのコントロールが損なわれることは「悪徳 Laster」（Campe 1979b:219）とまで言われ、それは大きく目に見える形で補われなければならない。カンペは、エースト（J. F. Oest, 1755-1815）が寄せた論文にでてくる「インフィビュレーション Infibulation」という方法に大いに関心をもって、その効力について、同じ『点検書』の中で論じている。それは、魂が身体をコントロールできないことによって行われる自慰行為を、物理的に防止するために、金属製のリングを陰茎にはめることである（Campe 1979b:220-221）。

また、カンペは自分の娘に対して「乱暴な視覚教育」を行ったという。ルソーは『エミール』の中で、成人した男を梅毒患者のための病院へ連れていくシーンを描いているが、カンペは実際に彼の 14 歳の娘に対して、それを行ったそうである（マレ 1995:245-246）。だが、「カンペは決して例外的な人物ではなかった」（マレ 1995:247）とも評されており、この時代―つまりフーコーが言う「生－権力」が子どもにも及ぶ時代―の風潮では、他の教育家もこのような教育に賛同していた。

バゼドウが設立したデッサウの学舎を離れ、シュネッペンタールに自らの学校を設立したザルツマンも、同じく魂がコントロールできない身体に対しては、寓話というわかりやすい形式で子どもにその罪を認識させている。例えば、猥褻行為を行った子どもが、両親の元に帰ってきたときには、「その行為の結果は、目に見えるように sichtbar になっているのでした」、もしくは「彼らの両頬は青ざめ、瞼の周りには青い皺ができ、額にはひだが現れているのが目に見えるのでした」（Salzmann 1897:81, 236）というように、身体に対する可視的な罰が与えられることを示している。また、道ならぬ恋をし、青年士官に身体を許すようになった「淫奔な娘」（Salzmann 1897:117, 361）は、性病をうつされるという物語を描いている。だが、すぐにその症状を記述するのではなく、彼女が乳母として勤め出した後に、その乳飲み子の「唇と鼻のところに、どうしたことか、吹き出ものが目に付くように」（Salzmann 1897:118, 366）なるという。つまり、魂が身体をコントロールできなかったことに対する罰則は、その本人ではなく、その仕事で乳を与えた子どもに現出するという形で、その罪の大きさをより暗示するような形で描かれる。

このように、魂と分離させられた身体は、バゼドウらの汎愛派教育家によって、さらに巧みな方法で「政治学」の下におかれ、管理が進められることとなる。それは、コントロールされない身体の要素、およびそれによって引き起こされる悪しき帰結、またはその防止方法も身体のレベルで、まさに具体的に示されることによってである。

このような性のコントロールは、子どもや青少年のみならず、成人した市民にも要求される

ものである。近代国家の勃興に伴い、人口政策の充実が強く推奨されることになっていた。このような文脈から、バゼドウは成人の事例についても、子どもたちに教授すべく『基礎教科書』で頁を割いている。これはフーコーが「生－権力」の一つのレベルとして設定した「人口の生－政治学」に関わってくる。バゼドウは、「性の傾向性 Neigung」と題された項目において、図版をつけて、次のように記述している。

> 性の傾向性を、結婚した男や女、または家父や家母になるという才覚や決意なしに営むものは、いずれにせよ言い知れぬ悲しみを生み出すものである。この悪徳はみだら Unkeuschheit、ないしふしだら Unzucht であり、生全体の至福の大部分を台無しにするものである。それに対し、結婚した人々の愛は最高の幸せである。（Basedow 1972-1: 140）

この性の傾向性とは、魂にコントロールされない身体の要素と言ってよいだろう。つまり、自慰同様に、他者に対しても性的に奔放に振る舞おうとする傾向性は、幸福を失うという罰則によって制御される。これはマクロなレベルでは、国家が性交を家庭に限定することによって人口を増やすということに関わってくるものであり、またミクロなレベルでは、個々人を有為な市民活動に向けさせるということになる。

このようなマクロにでもミクロなレベルにでも身体の傾向性を統御する観点は、ペスタロッチも論じている。彼は、当時の嬰児を遺棄してしまう傾向を嘆き、『立法と嬰児殺し』を 1783 年に刊行している。

> 自分の自然衝動 Naturtrieb をみたしながら父親にならない青年は、堕胎したり、出産の時に児をしめ殺す少女と同じく嬰児殺しだ。そして自分の感性的な欲望をみたしながら、わざと妊娠しない少女は、国家に対して青年と同じく嬰児殺しだ。しかしこの場合、誰が罰を与えるのか。またこの外に誰かが処罰されねばならないのか。しかも嬰児殺しの第一原因である未婚者たちのみだらな行為が、国家の公けの処罰を受けぬとは、何と奇妙なことだ。（Pestalozzi 1930:29-30, 43）

この論は、先ほどのザルツマンのように女性の性的奔放さを揶揄するのではなく、バゼドウ同様に若者が結婚をせずに性的欲望を満たしてしまうことをペスタロッチは非難している。そのような青年も、少女も同じく、結婚と人口を管理する国家からすれば同罪であり、結果的には、弱い立場にあり、女性を誘惑する男性に比べて罪の少ない女性に懲罰が結果的に降りかかることをペスタロッチは、この著作全体で問題にしている。

このように、バゼドウら汎愛派、およびペスタロッチというドイツの啓蒙教育学において、

身体はマクロにもミクロにも統御されるべきものであった。だが、その悪しき身体の情動を統御しながらも利用しようとする教育家も登場してくる。それが『身体の陶冶について』という大著を 1787 年に著した、汎愛派の教育家であるヴィヨームである。彼にとっても魂が人間の本質であり、人間の自我である（Villaume 1979:213）。そして「肉体は単なる道具である」と規定されるが、「その道具は魂の力を発達させるものであり、外化する äußern ことができる唯一で普遍的な道具である」（Villaume 1979:215）とまで、ヴィヨームは言う。道具としての身体が、魂を発達させるというこの言明からは、バゼドウと違って、ヴィヨームが身体からの魂への働きかけを重視していたことが見てとれる。このような流れで、ヴィヨームは、身体が魂を発達させ、魂を外化する役に立つ道具であるのみならず、それが悪しき部分をもち、その部分すらも利用できることを認識しているようである。

「不都合な情動 Leidenschaft によって朦朧とさせられ、静かにさせてもらえない魂は、澄んでいる状態で考えることができない」（Villaume 1979:217）というように、そのほとんどが身体の中にあるとされる情動は、魂を惑わすものである（Villaume 1979:216）。だが、その情動は、バゼドウらの先駆者たちがしたように、完全に悪しきものとして切り捨てられるものではない。ヴィヨームは、「情動は人間を動かす衝動装置 Triebwerke である」（Villaume 1979: 216）と述べる。バゼドウにとって、人間とは魂のことを指していたし、その魂こそが身体を道具として動かしていたのであった。だが、ヴィヨームにとっては、魂が人間を運動させるのではない。身体に宿る情動が、人間を動かす。つまり、情動は、魂を悪しき方向へ惑わしながらも、魂を動かし、発達させるという両義的な価値を有するのである。

バゼドウやカンペ、ザルツマン、ペスタロッチにとって、身体とは、魂と区別されるものであり、魂のコントロールを受けるものであった。すなわち、いかに身体訓練の意義を訴えたとしても、それは身体を操る魂の訓練である。それゆえ、魂がコントロールできない身体の部分は目に見える形で罰を受け、排除されていった。だが、ヴィヨームはその悪しき部分すらも、情動という概念を被せて活用しようと試みるのである。したがって、必要なのは、魂が情動を根絶やしにすることではなく、情動を「飼い馴らす bändigen」（Villaume 1979:285）ことである。

バゼドウ、カンペ、ザルツマンにとっての身体の教育とは、絶対的な司令塔として前もって存在していた魂が、コントロールできないものを可視化し、コントロール可能にする、またはコントロールできないものを切り捨てるというものであった。だが、ヴィヨームに到っては、その魂が司令塔たりえるには、身体に宿る情動をうまく飼い馴らさなければならない[22]。そのための手法が、ヴィヨームにとっての身体の教育である。

> この身体の教育は、身体を刺激の少ないものにし、情動の嵐に抵抗する熟練を積ませなければならない。その教育は、鍛練を通して、得られる印象を激情的なものにしないよう

に、情動を大きくしないように配慮しなければならない。（Villaume 1979:286）

もはや、ヴィヨームにとっては身体は懲罰の対象ではない。ただし、情動が高ぶらない予防のために、身体は常に監視されるものとなる。ここで思い起こされるのが、フーコーの冒頭の「人間の身体の解剖－政治学」についての定式の一つ、「身体の有用性と従順さとの並行的増強」であろう。また、加えていうならば、『性の歴史Ｉ』に先立って書かれた権力論の重要な著作であるフーコーの『監獄の誕生』は、この身体の「飼い慣らし」について論じたものである。彼はそのような身体への書き込みの担い手がその身体を有する人間の内側に宿っていった事態を描き出している。

ある一つの＜精神＞がこの人間像に住みつき、それを実在にまで高める、だが、この実在それ自体は、権力が身体にふるう支配の中の一つの断片なのだ。ある政治解剖の成果にして道具たる精神、そして、身体の監獄たる精神。（フーコー 1977:34）

精神―バゼドウの言葉では魂―が身体に権力をふるい、コントロールする。では、その権力は誰が担い、誰が保証するのか。近代の政治権力を解剖していくと、そこには絶対的な権力者はおらず、近代的な市民＝主体一人一人の内側にある魂・精神に突き当たり、その魂・精神が権力の道具として身体の「監獄」となるというのが、フーコーが『監獄の誕生』で描いた構図であった。そこには、誰かが他の人間を支配するという図式はなく、主体は主体となるべく自らを支配する。その内実は、目に見えない魂・精神による、欲望という人間を惑わすものをもつ身体のコントロールであった。そして、主体はそのような自らの支配を自発性と呼ぶのである。バゼドウやペスタロッチで見たように、このような自らの支配は、道徳的ないしは美的と呼ばれる。そして、このような自らによる自らの支配、つまり自発性をどのように養うかは、以後の近代教育の歴史を貫く教育の目的となっていく。

おわりに

ここまで、ドイツ啓蒙教育学の教育家の著作から、フーコーの「生－権力」論を支える「人間の身体の解剖－政治学」と「人口の生－政治学」にあたるものを抽出してきた。主にバゼドウらの汎愛派の著作から、身体を要素に分解し、コントロールしていく技術を見てきた。また、カンペ、ザルツマン、ヴィヨームの議論では、性というコントロールしにくいものを、それが発現される手前においてどのようにコントロールしていくかについて論じられていた。それらはフーコーが言うところの「思春期の性の言説化」、「言説による身体矯正法」の内実にあたるものであると、本稿筆者は考えている。フーコーは、もちろん啓蒙教育学の文献を精査して、

冒頭で見たような『性の歴史Ⅰ』の一節を記しているのだろうが、実際の啓蒙教育学のテキストがもっている教育の技術の具体は、そこからは窺えない。そのような意味で、本稿はその具体を、フーコーをガイドとすることで、再度取り出している。そのことには教育思想史の仕事として、一定の意義があるのだろうと考えている。ただし、フーコーが述べたことを超えるような含意―内容が内容だけに豊穣さというのか、残酷さというのかはわからないが―をその歴史的なテキストがもっているのかどうかは、本稿筆者には判別しづらい。この点に関しては、今後さらに原著を読み込んでいくことによって、またフーコー以外の他の文献に依拠することによって、別の視角から読み込んでいくことを試みてみたい。というのも、本稿では、18 世紀ドイツの啓蒙教育学として取り上げている著作群は、膨大なものであるし、また汎愛派が決して一枚岩でないと言われるように、複数の方向性をもっているものであると考えられる。

このようなテキストの扱いについての反省を踏まえた上でも、本稿は、18 世紀後半からの近代教育学の端緒にあたる時点でのドイツ啓蒙教育学における身体と教育をめぐる思想的な状況の一端を明らかにし得たと思っている。教育者が子どもの身体を扱う技術は、今日まで引き継がれているものも多い。体罰といった目につきやすいもののみならず、性や欲望をめぐる教育の技術は、フーコーが「言説による身体矯正法」として思想的に可視化したことによって、今日の私たちとっても理解が及ぶものとなっている。たとえ、今日、性教育が、人権に配慮したものとなり、国際的なコンセンサスをとって、文化差にも配慮しようとしたガイドライン[23)]を策定しようとしていても、そのような性という個々の人間の身体に根差した私的な事象を教育という公の場でどのように扱うかは、とても難しい問題である。本稿で見たようなドイツ啓蒙教育学のテキストは、その困難さを解き明かす一つの源泉になりうるものであると、本稿筆者は考える。このような今日の性教育の問題も一つの事例として包含するような、近代教育学の歴史的レイアウトを本稿では提示しえたように思われる。そして、このレイアウトは、他の教育学の諸問題をも部分的に包含し、他の問題系と隣接する研究の基盤となるだろう。

【注】

1）ドイツ語の身体に当たる語は、Körper と Leib の二つがある。ラテン語経由の Körper は近代科学の対象となる物体という意味を併せもつ。また、ドイツ語土着で生 Leben と語源的なつながりがある Leib は肉体というようにでも訳せるだろう（Borsche / Kaulbach 1980）。この二つの語の区別について、例えば、グーツムーツの『青少年の体育』においては、Körper が多く用いられ、Leib が少ないという調査もある（山本 2019）。だが、18 世紀後半のドイツ語において、身体に言及する際に、個々人の論者の傾向以上に、その 2 語の使い分けは明確でない。本論で検討するバゼドウ、カンペらも Körper と Leib の違いについて、明確に区分しているとは言えない。そこで、その語感を残すために、引用文中の Körper は身体、Leib は肉体と訳し、本稿の地の文の記述においては、その二つを包含する語として身体という語を用いることにしたい。

2）本稿は、（弘田 2000）、（弘田 2007）、（弘田 2010）、（弘田 2023）の論考と重なりあうものである。ただし、本稿では、フーコーの『性の歴史Ⅰ』を参照しながら、「生－権力」というテーマに特に焦点を当てており、そのようなドイツ啓蒙教育学理解はこれまでの論考では集中的に論じていないものである。

3）本稿と同様に、汎愛派やペスタロッチの著作群と実践に、ドイツ啓蒙教育学としての一つのまとまり

と近代教育学の萌芽を見るものに（森川 2010）がある。

4）ドイツ啓蒙教育学、特に汎愛派の身体の教育を論じる研究の多くが重視している研究に、ベルネットのものがある（Bernett 1960）。それは、身体の教育が道徳教育としての意味をもつという観点から道徳・宗教的な幸福を目指すバゼドウの教育論を分析しているが、体罰やその他の教育の技術について身体と権力といった批判的な観点からの考察はない。そのような批判的な観点をもつものとして、いわゆる「闇教育」を告発する研究の一群がある。それらはルーチュキーの古典的な教育論のアンソロジーが嚆矢であり、そこではバゼドウら汎愛派の著作がかなりの分量で登場し、悪しき身体教育の筆頭格として取り上げられている（Rutschky 1977）。また、ドレーセン（Dreßen 1982）やマレ（マレ 1995）のものでもバゼドウ、カンペらは子どもに害を与えるのを厭わない野蛮な教育家の代表として描きだされる。18 世紀後半の思想史全般を視野に入れた、ドイツのポストモダン的思想史研究の影響力のある著作（Böhme / Böhme 1983）で、H. ベーメと G. ベーメは、ルソー、カント、カンペ、ペスタロッチを例にあげて、近代教育学を身体を作り替えるプログラムだと論示している。つまり、カントに端を発する人間を人間にする近代市民教育のプログラムは、食餌療法と比せられるような、肉体を身体に変えていくプログラムとして提示されている。

5）「闇教育」として評価が落ちたバゼドウの教育実験を当時の先駆的教育改革運動として再度読み直そうとした近年の研究に（Louden 2021）がある。

6）訳語の一部は、本文の記載に合わせて改変した。他の引用でも同様である。

7）本稿では詳述されないが、ドイツ啓蒙教育学のテキストがもつ教育実践的な働きを分析したものに（弘田 2023）がある。

8）学校教育のみならず家庭でのしつけをも対象にして 18 世紀後半のドイツでの教育の技術について網羅的に論じているものに（Fertig 1984）がある。教育法、児童の管理や懲罰などといった教育の技術について、代表的な教育者のテキストやその様子を戯画的に描いた当時の図版によって示されている。バゼドウやカンペのテキストからは体罰の事例や彼らのそれについての見解が紹介されている。

また 18 世紀後半のドイツ啓蒙教育学における、本稿では扱っていないバールト（C. Bahrdt, 1741-1792）やストゥーフェ（J. Stuve, 1752-1794）ら神学者の教育観における身体の問題を主題的に扱ったものに（Wehren 2020）がある。身体は教育の媒体としてだけでなく教育の出発点であり目的でもあったこと、そして Fertig のもの同様に教育の技術の確立とともに、教育家が身体を直接の教育対象としなくなることを同著は論示している。

このようにいくつかの文献において、身体が教育思想および技術の不可欠な一部とみなされていたことが示されるが、汎愛派の具体的な教育の技術について、フーコーの『監獄の誕生』や『性の歴史Ⅰ』の議論を受けて、論じたものはほとんどない。それを行ったものは、本稿でも扱うバゼドウやグーツムーツら汎愛派の教育論において、近代的な身体の管理技術の発端を見た（König 1989）である。だが、そこでは主に汎愛派の体育論およびその教育の技術が論じられ、性の問題は重視されていない。そのようなことで、本稿は König の文献では取り上げられていない、ドイツ啓蒙教育学における「生－権力」論について分け入っていくことになる。

9）本稿は、フーコーの一連の「生－権力」論に依拠することになる。ただし、ここでは、フーコーが断片的にしか扱っていない 18 世紀後半のドイツ啓蒙教育学のテキストにおいて、フーコーの論の確かさを確認しながら、論じていくこととなる。また、フーコーの権力論については、フーコーの生前から様々な批判も存在する。例えば、『性の歴史Ⅰ』の出版直後の J. ボードリヤールのそれへの批判は、その議論の緻密さは称賛しながらも辛辣なもので、端的には「フーコーの場合には権力が欲望のかわりをしている、というだけのことだ」と評している（ボードリヤール 1984:17）。さらに近年では、フーコーの権力論に依拠しながらも、そこにおける権力の一面性・一方向性を批判する議論も多く登場してきている。例えば、（モル 2016:90-）においては、そのような権力が医療実践のような場においては、複数のアクターによる連携の連なりによって担われていることが明らかにされている。このような権力を分散的に記述する社会学研究からは、フーコーの権力論から距離を取ることも提唱されている。本稿は、そのようなフーコーへの批判や、以下の注にも示したアレントやアガンベンの議論も念頭に置きながら、フーコーが「生－権力」として捉えたものを 18 世紀後半のテキストにおいて検証していくことになる。

10）（白水 2004）は、フーコーに依拠しながら、近代ポリスの統治には、広義の教育的な配慮が底流にあり、それが近代教育学の生成と連動していることを、A. H. フランケらのポリス論に探っている。

11）近年の近代思想史学においては、このポリス論および、そこでの生の在り方をめぐって、多くの議論が展開されていることも付け加えておく。その源泉として、すでに見たフーコーの「生－権力」論と並んで、H. アレントの生の理論がある。『人間の条件』（アレント 1994）では、古代ギリシャの生を示す語は、「ゾーエー」（単なる生命的な生存）と「ビオス」（善く生きることを志向する生活）との二つに分かれていたことが説かれる。古代ギリシャ以来、市民は、私的な生（政治的な公共性を剥奪された生）ではなく、社会的・政治的に善く生きることを志向していたとアレントは言い、近代社会は市民の生活を私的な領域に押し込めて公共領域をやせ細らせてきたとして、この「ビオス」の復興を世界大戦後の市民社会で唱えていた。そして、近年のこのフーコーおよびアレントの生をめぐる議論を再燃させるきっかけになったのは、『ホモ・サケル　主体権力と剥き出しの生』（アガンベン 1995）であろう。アガンベンは、アレントの「ビオス」への志向に対して、実は近代市民社会・ポリス社会は、「善く生きること（ビオス）」に「ただ生きること（ゾーエー）」が包摂的に排除されていると指摘する。包摂的な排除とは、例えば、近代市民にとっては、性が生殖という意義で家庭という社会的な場に包摂されているにもかかわらず、その欲求は市民道徳において統御され、結果的に市民社会には位置づかないものとして排除されてきたということである。

12）汎愛派を網羅的に取り扱い、以後の研究のベースとなっている古典的な著作には、（Pinloche 1914）があり、本稿でも参照している。その書 500 頁の約半分がバゼドウに関する記述であり、それに続く流れとしてザルツマンやロヒョー、カンペらが紹介されている。

13）ここで挙げた人物はデッサウでバゼドウと協力して、汎愛学舎の教育実践を作り上げてきたと言えるだろう。ただし、例えば、バゼドウに次ぐ著名な教育家として知られるカンペは、1776 年から翌年にかけての 11 ヶ月しかデッサウに滞在していない。このように汎愛派と呼ばれる教育家の多くとバゼドウの関係性は密なものばかりではない。そのようなことから、彼らを汎愛派という枠組みで捉えずに、個別の評価が必要だという論も存在する（塩津 2015）。

14）この教科書の構成およびその教育の戦略については、（弘田 2023）で詳述した。また、本稿で『基礎教科書』という場合、1774 年に刊行されたものを指す。

15）出典の（）中に、頁数が二つある場合、最初のものは原語、二つ目は翻訳のものである。以降も同様。

16）体育学説史として、このような身体の要素化を取り上げたものに、ケーニッヒの『身体・知・力』（1989）がある。汎愛派を一つの思想のまとまりとして捉え、その身体観を各人の著作から構成することによって、身体が「特別な知―力―構造」（König 1989:5, 12）に組み込まれるプロセスをケーニッヒは提示する。このプロセスの中で近代的な知が身体を組み込むことで発生していくというモチーフは、主にフーコーに依るものである。ケーニッヒも、バゼドウやグーツムーツの身体の要素化を「解剖」という言葉で論じている。

17）汎愛派における魂 Seele が、宗教的な「魂」と心理学的な「心」の二義性をもち、その二義性こそが汎愛派の教育思想の根本原理であることを論じているのは（山内 2010）である。

18）この著作の後半部は、ペスタロッチの協力者ニーデラー（J. Niederer, 1779-1843）の手によるものというのが定説となっている（長田 1960:309）。ペスタロッチが身体を全面的にかつ自由に発達させることを説く前半部と、ニーデラーが身体運動を理論的に方法論化する後半部とで成り立っているが、このニーデラーが認識、道徳、美という三分法―伝統的な哲学の三分法であり、同時代人のカントもその批判哲学で用いている三分法―を用い、それをペスタロッチも受け入れたということでここでは理解する。

19）このような認識、道徳、美という区分は、古代ギリシャ以来の古典的区分であるが、同時代の哲学者 I. カント（I. Kant, 1724-1804）において完成されていたと言ってよいだろう。『純粋理性批判』（1781）で人間の認識の問題、『実践理性批判』（1788）で道徳の問題、『判断力批判』（1790）で前の二つをつなぐ美の問題が扱われて、彼の批判哲学が完遂されるのを見てもわかる通りに、この三区分はバゼドウ、ペスタロッチだけが有していたものではなく、当時の思想界に広く流布していたものである。このことからも考えて、身体は当時の教育界、及び思想界一般の共通の問題であったことがわかる。

20）「17 世紀の初頭には、まだある種の率直さが通用していた、と人は説く。･･･卑俗なもの、猥褻なもの、

淫らなものの基準は、19 世紀のそれと比べればずっと緩やかだった。直接的な仕草、恥かしいとも思わぬ言説、はっきり目に見える侵犯行為。あけすけにも体を見せ、簡単に結合させる。ませた子どもたちが走りまっていても、大人たちは大笑いするだけで、誰も照れたり恥かしがったりしない。つまり誰の身体も、いわば孔雀が羽根を拡げるように大手を振って歩いていた。

この白日の光に続いて、たちまち黄昏が訪れ、ついにはヴィクトリア朝ブルジョワジーの単調な夜に至り着く。性現象はその時、用心深く閉じ込められる。新居に移るのだ。夫婦を単位とする家族というものが性現象を押収する。そして生殖の機能という真面目なことの中にそれをことごとく吸収してしまう。性のまわりで人は口を閉ざす。夫婦が、正当にしてかつ子孫生産係りであるものとして君臨する」（フーコー 1986:9-10）

21）この液汁と病の連関については、近代になっても受容されていたヒポクラテス主義の体液理論が背景にある。その理論の大成者であるローマ帝国時代のギリシャの医学者ガレノスによると、多くの病の原因は、過剰、未消化や腐敗した体液であり、それらを排出するために運動、入浴、マッサージ、時には瀉血という方法が用いられた（マターン 2017:246-）。

22）本稿は、他の汎愛派の教育家と比べて、ヴィヨームの特質を明らかにするというよりも、ドイツ啓蒙教育学の一つのバリエーションとしての、ヴィヨームの身体論について論じている。ヴィヨームに焦点を当てたものとして、ヴィヨームが子どもの性の目覚めという教育者にとって危機的な局面において、どのような家庭・学校・社会的な関わりが必要であるかを考えていたことを、（西村 2006）が論じている。

23）このようなガイドラインに、例えば（ユネスコ 2020）がある。

【引用・参考文献】

アガンベン, G.（2003）: 高桑和巳訳『ホモ・サケル　主体権力と剥き出しの生』以文社, 1995

アレント, A.（1994）: 志水速雄訳『人間の条件』筑摩書房, 1994

Basedow, J. B.（1965a）: Vorstellung an Menschenfreude und vormögende Männer über Schulen, Studien und ihren Einfluß in die öffentliche Wohlfahrt [Orig.1768], in besorgt von A. Reble, *Ausgewählte pädagogische Schriften*, Paderborn, 1965（バゼドウ, J. B., 金子茂訳「人間の友および有産者諸君に対する提言」バゼドウ, J. B., トラップ, E. Ch., ロヒョウ, F. E., 田中昭徳、金子茂訳『国家と学校』明治図書、1969）

Basedow, J. B.（1965b）: Zum Dessauer Philanthropin [Orig.1774], in *Ausgewählte pädagogische Schriften*

Basedow, J. B.（1972 -1, -2）: hrsg.von Fritzsch, Th., *Elementarwerk mit den Kupfertafeln Chodowieckis u.a.*, Band 1, 2, Hildesheim, 1972 [Orig.1774]

ボードリヤール, J.（1984）: 塚原史訳『誘惑論序説』国文社、1984

Bernett, H.（1971）: *Die pädagogische Neugestaltung der bürgerlichen Leibesübungen durch die Philanthropen*, Schorndorf, 1971

Blankertz, H.（1982）: *Die Geschichte der Paedagogik*, Wetzlar, 1982

Böhme, H., Böhme, G.（1983）: *Das Andere der Vernunft. Zur Entwicklung von. Rationalitätsstrukturen am Beispiel Kants*, Frankfurt/M., 1983

Borsche, T., Kaulbach, F.（1980）: Leib-Korper, in hrsg. von Ritter, J., Gründer, K., *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Band5, Basel/Stuttgart, 1980

Campe, J. H.（1979a）: Über die grosse Schädlichkeit einer allzufrühen Ausbildung der Kinder [Orig. 1786], in herausgegeben von Campe, J. H., *Allgemeine Revision des gesamten Schul- und Erziehungswesens von einer Gesellschaft praktischer Erzieher*, Vaduz, Teil 5, 1979

Campe, J. H.（1979b）: Zusatz des Herausgebers [Orig.1787] in Oest, J. F., Versuch einer Beantwörtung der pädagogischen Frage, in herausgegeben von Campe, J. H., *Allgemeine Revision des gesamten Schul- und Erziehungswesens von einer Gesellschaft praktischer Erzieher*, Vaduz, Teil 6, 1979

Dreßen, W.（1982）: *Die pädagogische Maschine*, Frankfurt/M, 1982

Fertig, L. (1984): *Zeitgeist und Erziehungskunst. Eine Einführung in die Kulturgeschichte der Erziehung in Deutschland von 1600 bis 1900*, Darmstadt, 1984
フーコー, M. (1977): 田村俶訳『監獄の誕生』新潮社, 1977
フーコー, M. (1986): 渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』新潮社, 1986
Gutsmuths, J. C. F. (1928): *Gymnastik für die Jugend, Dresden*, 1928 [Orig.1793] (グーツムーツ, J. C. F., 成田十次郎訳『青少年の体育』明治図書出版, 1979)
弘田陽介 (2000):「バゼドウ『基礎教科書』における身体」教育思想史学会編『近代教育フォーラム』第 9 号, 173-186 頁, 2000
弘田陽介 (2007):『近代の擬態／擬態の近代 カントというテクスト・身体・人間』東京大学出版会, 2007
弘田陽介 (2010):「母と子の間で身体が生まれる－ドイツ啓蒙教育学における「身体＝メディア論」研究序説－」『教育哲学研究』第 101 号, 78-99 頁, 2010
弘田陽介 (2023):「ドイツ啓蒙教育学における「身体＝メディア」論－汎愛派バゼドウ『基礎教科書』の読者の分析から－」大阪公立大学文学研究科紀要『人文研究』第 58 号, 35-58 頁, 2023
金塚貞文 (1982):『オナニスムの秩序』みすず書房, 1982
König, E. (1989): *Körper-Wissen-Macht*, Berlin, 1989 (ケーニッヒ, E., 山本徳郎訳『身体－知－力』、不味堂出版, 1997)
Louden, R. B. (2021): *Johann Bernhard Basedow and the Transformation of Modern Education: Educational Reform in the German Enlightenment*, London, 2021.
Lüth, Ch. (1990): Das Bild der Aufklärungspädagogik im Spiegel deutschsprachiger pädagogischer Lexika der 19. Und 20. Jahrhunderts, in *Paedagogica historica*, 26 (1), SS. 67-83, 1990
マレ, C. H. (1995): 小川真一訳『冷血の教育学: だれが子どもの魂を殺したか』新曜社, 1995
マターン, S. P. (2017): 澤井直訳『ガレノス: 西洋医学を支配したローマ帝国の医師』白水社, 2017
モル, A. (2016): 浜田明範, 田口陽子訳『多としての身体』水声社, 2016
森川直 (2010):『近代教育学の成立』東信堂, 2010
長田新 (1960):「体育論 解題」(ペスタロッチ, J. H., 吉本均訳「体育論」『ペスタロッチー全集第 11 巻』平凡社、1960)
西村美佳 (2006):「ヴィヨームの性教育論―自瀆と子ども―」山本徳郎、杉山重利監修『多様な身体への目覚め―身体訓練の歴史に学ぶ―』アイオーエム, 2006。
Pestalozzi, J. H. (1930): Über Gesetzgebung und Kindermord. Wahrheit und Träume [Orig.1783], in bearbeitet von Dejung, E., Guyer, W., Schönebaum, H., *Pestalozzi sämtliche Werke* Bd.9, Berlin und Leipzig, 1930. (ペスタロッチ, J. H., 杉谷雅文訳「立法と嬰児殺し」『ペスタロッチー全集第 5 巻』平凡社, 1959)
Pestalozzi, J. H. (1963): Über Körperbildung als Einleitung auf den Versuch einer Elementargymnastik, in einer Reihenfolge körperlicher Übungen [Orig.1807], in bearbeitet von Dejung, E., *Pestalozzi sämtliche Werke* Bd.20, Zürich, 1963. (ペスタロッチ, J. H., 吉本均訳「体育論」『ペスタロッチー全集第 11 巻』平凡社, 1960)
Pinloche, A. (1914): deutsche Bearbeitung von Rauschenfels, F. und Pinloche, A., *Geschichte des Philanthropinismus*, Leipzig, 1914
Rutschky, K. (1977): herausgegeben und eingeleitet von Rutschky, K., *Schwarze Pädagogik. Quellen zur Naturgeschichte der bürgerlichen Erziehung*, Frankfurt am Main/Berlin/Wien 1977
Salzmann, Ch. G. (1897) herausgegeben von Ackermann, E., Ch. G. *Salzmanns ausgewählte Schriften*, Langensalza. Bd. 1, 1897. (ザルツマン, Ch. G., 田制佐重訳『蟹の小本 コンラード・キーフェル、蟻の小本』文教書院, 1925)
塩津英樹 (2015):「J. H. カンペによる「実践的教育者の会」設立過程に関する考察」『島根大学教育学部紀要』第 49 巻, 1-7 頁, 2015
白水浩信 (2004):『ポリスとしての教育―教育的統治のアルケオロジー』東京大学出版会, 2004
スタンジェ, J., ネック, A. V. (2000): 稲松三千野訳『自慰　抑圧と恐怖の精神史』原書房, 2000

ユネスコ（2020）: ユネスコ編, 浅井春夫, 艮香織, 田代美江子, 福田和子, 渡辺大輔訳『改訂版　国際セクシュアリティ教育ガイダンス』明石書店, 2020
Villaume, P.（1979）: Von der Bildung des Körpers in Rücksicht auf die Vollkommenheit und Glückseligkeit der Menschen, oder über die physische Erziehung insonderheit, in herausgegeben von Campe, J. H., *Allgemeine Revision des gesamten Schul- und Erziehungswesens von einer Gesellschaft praktischer Erzieher*, Vaduz, Teil 8, 1979
Wehren, S.（2020）: *Erziehung - Körper - Entkörperung. Forschungen zur pädagogischen Theorieentwicklung*, Bad Heilbrunn, 2020
山本徳郎（2019）:「ヤーンはグーツムーツの発展的継承者か？―初期トゥルネン史研究に学ぶ―」『体育史研究』第 35 号, 13-24 頁, 2019
山内規嗣（2010）:『J・H・カンペ教育思想の研究―ドイツ啓蒙主義における心の教育―』東信堂, 2010

The Education of Body on the German Enlightenment Pedagogy with the Reference to M. Foucault's Concept of 'Biopower'

HIROTA Yosuke

This paper addresses the education of the body in German enlightenment pedagogy of the late 18th century, as the beginning of modern European pedagogy, and clarifies its characteristics by analysing the texts of Philanthropinists, such as J. B. Basedow and J. H. Campe, and J. H. Pestalozzi. In doing so, this paper extracts the techniques by which educators utilised a child's body as a target of education by adopting M. Foucault's theory of 'biopower' as a research framework. Foucault's theory of 'biopower' consists of two levels: 'anatomy-politics' that elementalises and controls the individual human body, and 'bio-politics of population' that governs the whole citizenry. Foucault rarely referred to Enlightenment pedagogy. Nevertheless, applying these two levels to Enlightenment pedagogy's management of children's bodies and sexualities, this paper proves the validity of Foucault's theory for those texts and lays out how the education of the body in Enlightenment pedagogy was situated in the German educational thoughts of the late 18th century.

Keywords: German enlightenment pedagogy, J. B. Basedow, Philanthropinism, M. Foucault, Biopower